２０２３年２月２６日「荒れ野の誘惑」　　青戸教会　　高橋克樹牧師
聖書　申命記６章１０～１９節、ルカ福音書４章１～１３節

荒れ野の誘惑物語は共観福音書すべてに出てきますが、どうしても先入観を持って読み込んでしまうところがあるように思われます。それは、洗礼を受けられてからイエスは荒れ野で誘惑を受けるのですが、その誘惑は悪魔（サタン）によって最初引き起こされたのではないことです。聖書を丁寧に読めばわかることですが、洗礼を受けたイエスは聖霊に満たされていました。そして、その聖霊がイエスを荒れ野の中で引きまわした結果、悪魔が４０日間誘惑をしたのです。その４０日間の誘惑の具体的な内容は不明ですが、聖霊である神がイエスを荒れ野に向かわせ、神がイエスを悪魔と対峙させたのです。そして、その４０日間にわたる誘惑の期間が終わると、悪魔は最終的な仕上げとして、イエスの空腹に乗じて「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」と試みたのでした。

その誘惑にも動じないイエスに対して、今度は世界の国々の繁栄を見せて、「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう」と、誘惑したのでした。空腹にも、この世の栄耀栄華にも誘惑されないイエスを見て、悪魔はイエスをエルサレム神殿に連れていき、神殿の屋根の端に立たせて、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」と言って、今度は生命の危機に直面させて、悪魔の誘惑に屈するように試みたのでした。最初の２つの誘惑に対してイエスは聖書の言葉でもって、はねのけました（４節、８節）。ですから、今度は悪魔が聖書の言葉を用いて１０節にあるように、「神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかり守らせる」と言い、さらに、１１節にあるように「あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える」と言って、飛び降りても天使が守るのだから、大丈夫でしょう、と誘惑してきたのです。このあたりの悪魔の論理的な誘惑の展開は非常に賢いものです。

これに対してイエスは、「神である主を試してはならない」と反論して、悪魔の誘惑の言葉をものの見事に切り返したのです。このように、悪魔は４０日間の誘惑に加えて、３回の非常に巧妙な誘惑を仕掛けてきたのでした。１３節によれば、悪魔はあらゆる試みをやり尽くして、「時が来るまでイエスを離れた」というのです。この言葉の意味は何なのか。悪魔の誘惑は繰り返されているのだけれども、誘惑される側のイエスには、悪魔の誘惑が一時的に消滅したかのように思えるように悪魔は一時イエスを離れたのでしょうか。

イエスが悪魔によって誘惑されたこの３つの出来事は、人間的にみれば非常に魅惑的な誘惑です。何もない荒れ野にあって、生きることにうめき、泣き叫ぶ人間にとって、パンを求め、それが満たされれば栄華に恋い焦がれ、生命の危機的状況に際しては、神のご加護を求めるのは人間としては当たり前のことです。悪魔はこれらの人間的な欲求を満たしてやろうというわけですから、悪魔の誘惑は私たち人間の基本的な欲求を満たすところに生じているということです。イエスを誘惑する悪魔は、人間の欲求に乗じているわけで、決して最初から人間を悪の方向へと導いてはいないのです。

現代において、もし石をパンに変えられたとしたら、たくさんの人が飢餓から救われることにつながります。また、国々の権威と栄華も現代風に解釈し直すならば、国として貿易黒字が増えることを想定してみればわかるように、その国の国民生活は豊かになるわけで、国単位でみれば悪いことではないのです。最後の生命の危機的な状況に直面したならば、誰もが生命の維持を願うだろうことは間違いないことなのです。「地獄に仏」という言葉があるように、生命の危機的な状況に直面すれば、普段は信仰心を持っていなくても、多くの人は神のご加護を願うのです。

このように考えてくると、悪魔の誘惑は、人間のためになるという装いをしてやってくるということがわかります。悪魔が誘惑する際のささやく言葉に付随していることは、７節にあるように「もし、わたしを拝むなら、みんなあなたのものになる」という言葉です。これは単にかしずくという意味でもなければ、屈服するということでもありません。

わかりやすく言えば、自分の価値観の中で、何を一番上に置くかということなのです。お金を自分の価値観の中で一番上に置くならば、多くの判断がお金を基準に行われることになります。でも、そうなると、自分の自由な意思決定の体裁はとっていますが、お金の精神的な奴隷になっ

ている状態になっているのです。けれども、キリスト教の信仰というのは、自分の価値観の一番上に神を置くことで、それ以外の事柄すべてが相対化された生き方をするということです。神以外のものが相対化されるならば、それらの精神的な奴隷にならない生き方ができるわけで、人間は本来的な自由を得ることになります。この人間的な自由を得ることがキリスト教の信仰のひとつの神髄なのです。

ひざまずく相手を絶対化してしまうことで、自分自身を喪失させてしまうような呪縛から解放させるものがキリスト教信仰なのです。けれども、本日の悪魔の誘惑の記事のように、悪魔の誘惑は人間のためになるという装いをもって人間に接近してくるのです。

しかも、イエスが悪魔の誘惑に対して神の言葉で対抗したことを受けて、悪魔は神の言葉で人間に揺さぶりをかけてくるのです。「あなたは神さまを信じているけれども、神さまは本当にあなたを守ってくれて、幸いをもたらしてくれるのですか?」というような問いかけでもって、見えない神を信じることのむなしさを突いてくるのです。こうして、私たち信仰者も日々刻々このような悪魔の攻撃を受けているので、知らぬ間にその攻撃に組み敷かれかねないのです。

その代表的な誘惑の一つに、自分の愛する存在が亡くなってしまった場合に、「神は本当にあなたを守っているのか」という悪魔の問いかけが突きつけられるのです。また、自分が誠実に行ってきたのに、信頼している人に裏切られた時も同じような誘惑の言葉が襲ってきます。これは、それまでの安定した世界観の中で生きてきた自分にとって、経験の事故＝アクシデントのようなものです。これまでの思考や行動といった自分の手持ちの選択肢では対応できない事態に直面させられることなのです。そこで経験している自体が事故＝アクシデントなのです。

いうなれば、それまでの自分の経験の枠組みで対応できていたものが一挙に台無しになったかのような事態に直面させられたとき、悪魔は「神は本当にあなたを祝福し、守ってくれているのか」という誘惑にさらされてしまうのです。このような経験の事故＝アクシデントは、対岸で燃えていた炎を客観的に眺めていたうちは他人事なのですが、それがいざ自分の身の上に降りかかってくると、経験の事故＝アクシデントになってしまうのです。私たち人間は、この経験の事故＝アクシデントに遭うと、最初は何が起きているのかわからず、収拾がつかなくなります。この経験の事故＝アクシデントには短期間で回復できるものもあれば、何年かかっても立ち直ることができないものもあります。あるいは、事故＝アクシデントと共に、それまでの世界との関わり方が劇的に変わってしまうことも起こるのです。

最愛の人の死や、信頼していた人の裏切り、身体が失われるような障害を負うこと、不治の病の宣告などは、こうした経験の事故＝アクシデントを引き起こします。そして悪魔の誘惑にさらされてしまうことになるのです。けれども、経験の事故＝アクシデントに遭わない人生はありません。逆に言えば、経験の事故＝アクシデントに出会うことで、新しい自己が創り出されていくとも言えるのです。従来の安定していた自分の世界観では対処できない事態に直面することで、新たな事態に対処する経験の事故＝アクシデントが新しい自己を形成する

現代社会は、人間が自然を支配し、コントロールすることを目指して発展してきました。ですから、私たち人間は自分の人生もコントロールすることが当たり前のように考えるようになってきたと思います。けれども、経験の事故＝アクシデントに直面すると、それまでの自己コントロール感が失われてしまう事態に直面してしまうのです。あるご婦人が夫を天に送ってから1年後に夫と以前行った梅林を一人で見に行った時、自分と同じように一人で来ている人がたくさんいることにハタと気づいたという話を聞いたことがあります。そのことに気づいて悲しみに沈む自分を客観的に見つめられるようになったといいます。自分が当事者になったことで、今まで見えていなかった世界が見えてきたことが転機になったのでした。このように、事故＝アクシデントによって新しい世界に気づくことから新しい自己の形成が始まるのです。

イエスが洗礼を受けてから、神によって荒れ野で誘惑を受けることへと導かれたのは、神の意思です。その真意は測り知ることはできませんが、神の子でありながら人間として生きてきたイエスに起こった経験の事故＝アクシデントであったように思えるのです。イエスは悪魔の誘惑をはねのけましたが、人間が経験する事故＝アクシデントを経験することで、悪魔の誘惑にさらされる人間の弱さを味わったのではないでしょうか。人間の弱さを味わったがゆえに、ご自分の使命としての贖いの死を選ぶ道へと進んで行かれたのではないかと思わされるのです。